

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

ヲシテ文献にみるアワウタの役割

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2019-09-18 キーワード (Ja): ヲシテ文献, ホツマツタエ, アワウタ, 四十八音図, 縄文哲学 キーワード (En): 作成者: 内藤, 裕子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00007883

ヲシテ文献にみるアワウタの役割

内 藤 裕 子

要 旨

第十二代景行天皇の時代にまとめられた五七の長歌で書かれたヲシテ文献である「ホツマツタエ」と「ミカサフミ」の第一章に、アワウタが出てくる。アワウタは五七・四行の四十八文字でできた歌で、「アカハナマ」で始まり、それを並べると四十八音図ができる。

カミヨ六代の時代に、国が乱れて言葉も通じにくくなった。七代目を継いだイサナギとイサナミは、タミの言葉を整えてクニを立て直すために、上の二十四声をイサナギが、下の二十四声をイサナミが、楽器に合わせて歌い、農業や機織りも指導しながら全国を巡ったという。このアワウタで大人も子供も言葉を整えたというだけあって、音声学的にも驚くべき工夫があった。共通語として、日本語の拍の感覚を習得すると同時に、それぞれの母音と子音の発音の仕方を身に付けるのに最適な形になっているなどの知恵が詰まっている。そして、縄文哲学における重要な概念をも示している。

キーワード：ヲシテ文献、ホツマツタエ、アワウタ、四十八音図、縄文哲学

1. ヲシテ文献について

ヲシテ文献は、江戸時代、ヲシテ文字¹⁾で書かれた歴史書の写本の文献群が伝わる家系の人々やそれを見た人々により研究されたが、以後途絶え、昭和41年(1966)松本善之助氏により再発見された。以後、現在までに見出された文献は(表1)の通りである。そのうち、ホツマツタエ²⁾は全編出ているが、他は一部しか見つかっていない。

ヲシテ文献が日本書紀をまとめる上で重要な基礎文献資料であったという歴史的な位置づけについては、松本(2016)、池田(2001)、特に『定本ホツマツタエ』池田(2002)によるホツマツタエ・日本書紀・古事記の三書比較を見れば明らかである。ホツマツタエにある情報は半分以下しか記紀に伝わっていない。記紀に残っていない部分は、形は変わっていても、能、和歌、地方の伝承などに言葉、地名、習慣として随所に残っている。また、最近の考古学、遺伝子分析などの成果とも照合し、各方面の研究者と協力していくことが必要である。

前半は、ア段5音、イ段5音、ウ段5音と五七で区切りながら進み、「モ」に始まる後半は、オ段からア段へと戻る。「ン」の子音図象⁵⁾がワ行（傾いた正方形に近い形）であり、アワウタの並び順からウ段にあることがはっきりする。アワウタから再現される四十八音図の「ン」の位置は、現代日本語の音韻/ん/の、異音が多い（表3）⁶⁾という特殊な音声学の特徴から見ても、的確であると言える。どの異音をとっても「ウ段」であり、下記の例のように、ヲシテ文献に類出する「推量、意志等の助動詞・ン」が後に「ウ」に変化したことも自然である。

後続音	/n/の異音	例
[p] [b] [m] (両唇音)	[m] (両唇音)	「シンパイ」「ホンブ」 「サンミ」
[t] [d] [ts] [dz] [n] [r] (歯茎音)	[n] (歯茎音)	「テント」「カンダ」 「ハンツキ」「カンゼ」 「ホンネ」「カンロ」
[tʃi] [dʒi] [ɲi] (歯茎硬口蓋音)	[ɲ] (歯茎硬口蓋音)	「サンチ」「カンジ」 「コンニチ」
[k] [g] [ŋ] (軟口蓋音)	[ŋ] (軟口蓋音)	「サンカ」「ゲンゴ」
なし(語末)	[ɴ] (口蓋垂鼻音)	「ウドン」
[a] [i] [u] [e] [o] (母音) [j] [w] (半母音) [ɸw] [s] [ç] [h] (摩擦音)	[ʌ] (鼻母音)	「シンアイ」「タンイ」 「ハンエイ」 「シンヤ」「カンワ」 「カンフー」「カンサ」 「カケンヒ」「コテンハ」

(表3)

下記の表4は、文字と読み方の変遷の通説にヲシテ時代を加えたものである。ヲシテ時代のヲシテ文字、漢字国字化時代の万葉仮名は、便宜上、平仮名で表し、()内は想定されている読み方である。奈良時代に「む」を「ム」と発音していたものが平安時代前期には「ン」と読むようになったという説と、元々「ム」「ン」「ヌ」「ウ」の音が近いため、余り区別がされていなかったとの説もある。万葉仮名で表したものを後で異なる音や意味に解釈するといった混乱も起きてしまった。実際の発音については推測するしかないが、ヲシテ文献の四十八音図における「ン」の位置やその使用例からすると、漢字使用以前から話し言葉の発音は「ン」（異音を含む）あるいは「wu」（異音を含む）のままであった可能性も高いのではないか。

ヲシテ時代	漢字国字化時代	平安前期一	平安後期一	明治一	昭和中期一
かえさん (カエサン) wu?	かえさむ (カエサム?カ エサン?)	かえさむ (カエサン)	かえさん	かえさ <u>う</u> (カエソー)	かえ <u>そ</u> う
せん (セン) wu?	せむ (セム?セン?)	せむ (セン)	せん	せ <u>う</u> (シヨ一)	し <u>よ</u> う

表4

「ン」がワ行ウ段に属すというのは、どの五十音図にも見られなかった配列である。馬淵(1993)は、「五十音図」は悉曇学(梵字・サンスクリット)と漢字音韻学から発生し、平安時代末に両機能が一緒になり定着したと考えていると述べている。五十音図の長い歴史の中で現代に至るまで「ん」は存在しないか、行外に追いやられてきたという事実からは、漢字国字化により日本語の音素を万葉仮名を使って表現し直さねばならず、特に「ン」を表すのに困難を伴い、文字を失った代償が大きかったことが推察される。しかし、漢字と仮名を使いこなし、次々と新しい概念を表現し、日本語を発展させることができたのは、確固たるヤマトコトハの音韻体系と文法構造があったからに他ならない。

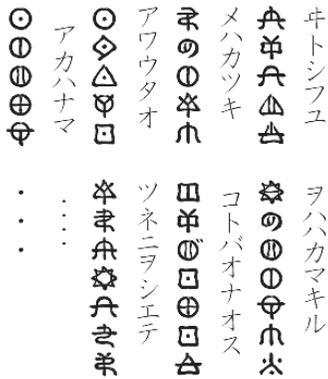
また、ヲシテ文献では、「ヰ」「ヱ」はワ行ではなく、ヤ行にある。これは字体から明らかである。元々、ワ行にはイ段とエ段が欠けていたのである。ヲシテ時代の後、漢字、梵字が入ってきてからの奈良時代から平安時代末期までの五十音図には、ワ行もヤ行も全部埋まっているものが多い。同じ字が入ったり、重なりに傍点があったりするの、日本語では同じ発音だという認識があったのだろう。

ヲシテ文献中には、語彙によって「イ」と「ヰ」、「エ」と「ヱ」、「オ」と「ヲ」、「ハ」と「ワ」等の表記のゆれが有るものがある⁷⁾。異なる意味を表しているのか、写本時代の判断、間違い等による変化なのかという判断は困難な場合があるとしても、同じか似通った発音であったと推定できる。各時代の五十音図を見ても、これらのペアの音声には区別がなかったのではないかと思われるほど、様々に入れ替わっている。現代でも「お」と「を」の発音はほとんどの場合同じであっても文字を使い分けているように、文字が違っていることが音声も異なる証拠とはならない。意味の違いがあるかどうかについては、ヲシテ文字には意味やイメージがあり、基本字形と特殊文字が使い分けられている例が多いため、詳しい検証が必要である。

2-2 国語教育

国語教育が喫緊の課題となった背景には、第7代アマカミ、イサナギ・イサナミの前の第6代オモタル・カシコネの時代に、気候変動により環境が変化し、言葉も通じにくくなり、強盗などが増えた状況があった。オモタル・カシコネはともに東北から九州まで全国を回って

治めたが、反省しない罪人を処罰する必要が生じ、木を切るための斧で切った因果か、継子がなかった。犯罪を予防し、裁くための象徴としてホコが作られ、皇族の中からイサナギ・イサナミが皇位を継承するにあたり、トノヲシテ（タミをやわして治めるという今でいう憲法）に加え、ホコ（刑法）が引き継がれた。従って、イサナギ・イサナミの使命は、共通語と稲作の普及、キミトミはタミのために働き、タミはそれぞれの役目を果たしながら皆で楽しく生活するという理念に立ったクニを生むこと、次代アマカミにふさわしい立派な継子を産み育てることであった。平和なクニを造るために、まず必要なのが、コトハの教育であった。



(図1)

ホツマツタエとミカサフミには、「キトシフユ ヲハハカマキル メハカツキ コトバオナオス アワウタオ ツネニヲシエテ アカハナマ・・・」と共通した記述(図1)があり、数え五歳(満3,4歳)の冬、男子はハカマ、女子はカツキを着て、(現代の七五三か)コトバをナオスアワウタを教え始めるとしている。

国語教育の道具としてアワウタは、拍の感覚、各母音子音の発音を伝えるのに優れていた。まず、五七調ではほぼ等間隔の拍の感覚が自然に身に付く。また、調子が整っているので、覚えやすい。同じ母音が5音ずつ続くことで口の形が安定し、その母音の形がしっかりわかり、同時に子音の違いが

際立つ。母音も5音ずつで次が変わり、アイウエオ、オエウイアと戻る。その変わり目で母音の違いも意識しやすい。そして、不規則なワ行も含めて正確な四十八音図が再現できる。

2-3 縄文哲学

発音の習得から始まり、後にはウタに含まれる哲学の理解に至るのだろう。母音図象のアイウエオはウツホ・カセ・ホ・ミツ・ハニの五要素を表す(表5)。

日オ	ㄨエ	△ウ	ㄩイ	◎ア
ハニ	ミツ	ホ	カセ	ウツホ
固体	液体	温かく 上がる	冷たく 下がる	気体

(表5)

子音図象もそれぞれイメージを持っている(表6)。ヲシテ文字は表音表意文字である。特殊文字の例を挙げる(表7)。象形文字のように意味により変化させた形がある。

㇗	十		丨	・
みのる もたらす	なる	とおる ふえる	つなぐ	はじめ
◇	上	一	人	Y
おわる おちつく	ほねる かえず	とめて ひろがる	ひろげる	あつめる

(表6)

特殊文字

基本	特殊	数詞	濁音古来	濁音付加
𐀀	𐀁人	𐀂1	𐀃	𐀄
	𐀅太陽	𐀆一人のヒ	𐀇	𐀈
	𐀉梭		𐀊	𐀋
	𐀌、𐀍火		𐀎	𐀏
◎	◎天地の天			
	◎改まった時に使う			

(表7)

また、文献内に文字と概念について説明がある。青木・平岡（2009）は、ヲシテ文字の図象と語彙・構文との関係について論じている。



モトアケ (フトマニの図)

(図2) 池田(1999)

48音 (ヨソヤコエ) の音韻は宇宙の成り立ちから発生し、キネナナミチノアウウタとは、根を構築する旧暦10月から2月までの5か月間と盛んに満ちていく3月から9月までの7か月であり、アワ (天地) ノフシであるという。

アウウタの五七のそれぞれの頭の音、アイフヘモヤスシ8音はアナミカミともいい、言葉、生命、食料を守るカミとされる。図2のモトアケの中心から3段目にある。中心のアウワの周りに48音すべてがある。

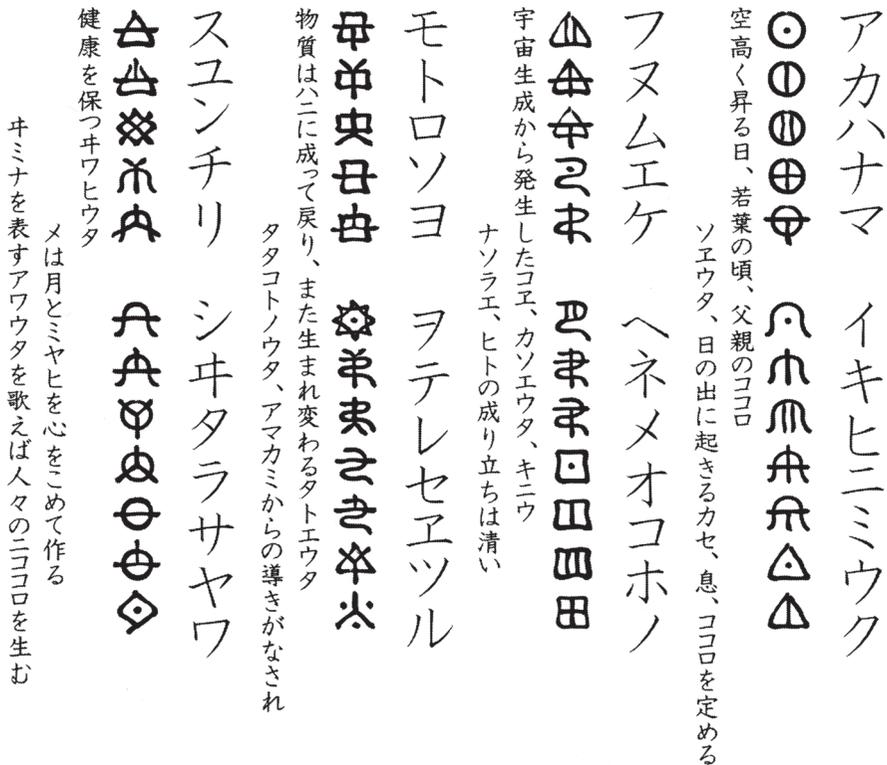
アマテルカミも毎朝、フテ (2拍手) とともに歌ったという。文献には、アウウタを歌うと、声が明らかになり、心身ともにメクリが良くなり長生きするとある。毎朝、宇宙、養ってくれる自然、先祖の功績に感謝して歌う心根は現代のキミトミタミにも伝わっている。(図3)

図3

3. アワウタの役割のまとめ

カミヨのナナヨメのイサナギ・イサナミが即位した頃は、天候の変化などによる農業不振や外からの人々の流入などにより、貧富の差が出て、治安が悪化していた。フタカミ⁹⁾がアワウタを歌ってタミのコトバを整え、アシ(ヨシ)を引き抜き、水田を作り、機織り等も教えてクニを次々と作っていった。キミトミタミがコミュニケーションを取り合い、皆助け合って仕事をし、豊かに楽しく暮らすクニを造って全国を回ったことがフタカミの功績と讃えられた。アワウタはヲシエ、やわすための大切な道具であった。

また、アワウタにある48音は、縄文哲学ともいうべき、人間を含む自然の成り立ち、生命の仕組み、先祖や自然との付き合い方を教える概念でもあった。ミカサフミ・ワカウタノアヤ(池田2013)には、子どもにもわかりやすいようにとアワウタの各句のイメージの説明があるが、非常に哲学的な内容になっている。(図5)



(図5)

4. 最後に

アワウタの織り成す四十八音図は、今までの五十音図とは作られた目的が異なり、機能的である。共通語の普及という役割を超えて、縄文哲学を理解するために重要な概念である。

ヲシテ文献の読み方、研究の仕方¹⁰⁾については、池田（2001）やヲシテ研究所のホームページ¹¹⁾に詳しい。日本語を知らない人にとっては翻訳で内容を知るのみであるが、日本語がわかる人であれば、練るに練られた格調高く掛詞（ダジャレ）の多い原文で味わい、これを見る人に伝えんとする筆者と登場人物の思いをひしひしと感じとってほしい。ヲシテ文字は、非常に学びやすい表音表意文字である。内容を手軽に知るために原文に軽はずみに現代語の漢字を当てはめただけのものを読み進めるのは避けるべきである。漢字により意味が限定されてしまい理解から遠ざかるばかりで、特殊文字にこめた思いも、掛詞の妙も、韻を踏んだ五七のリズムも味わえない。ヲシテ文字に慣れるまでは、解説の入ったより正確な大意を見てから、三書比較の原文の横の振り仮名を補助に繰り返し読むのも一つの方法だろう。それは、深い縄文哲学や技術の存在を確認する一步になる。

この宝を理解し、後世に伝えるために、考古学、歴史学、文献学、国語学、天文学、哲学、文化人類学、生物学、薬学、その他各分野における研究が待たれる。

謝辞

本稿執筆にあたり、ご助言をいただいたヲシテ研究所の池田満氏とご助言とともに写真資料も提供して下さった研究者、辻公則氏に感謝の意を表する。

付記

本稿の一部は、関西外国語大学国際文化研究所第5回IRI言語・文化研究フォーラムで発表されており、その内容に加筆修正したものである。また、本稿で使用している「縄文文字ヲシテ」は日本ヲシテ研究所が意匠権・商標権を所有している。

注

- 1) ヲシテ文字：「ホツマツタエ」の文献名からホツマ文字ともいう。江戸時代に伊予の国で、この文字が見つかっているので伊予文字とも呼ばれる。文献中の表記では「ヲシテ」とある。
- 2) ホツマツタエ：「エ」はヤ行エ段(ye)である。本稿では、原文を片仮名で表す場合、便宜上、ヤ行イ段(yi)には「キ」、ヤ行エ段(ye)には「エ」を使用している。
- 3) カミヨ：神武天皇からのヒトノヨに対して、それ以前にカミヨのアマカミが12代続いた。ホツマツタ

エの28アヤまでは、カミヨ12代ウガヤフキアハセズの時代にそれまでの歴史をまとめたものであり、カミヨ7代イサナギ・イサナミに継がれる経緯あたりからの出来事、心理の描写はかなり細かくなっている。

- 4) アマテル：カミヨ8代アマカミ・アマテルは、現在の通説では女神とされているが、今に言う「天皇陛下」、男性であり、13人の妃がいた。
- 5) 子音図象：ヲシテ文字の子音を表す部分。青木・平岡（2009）
- 6) 撥音/N/には多くの異音がある。上村（1989）等。
- 7) 表記のゆれの例としては、「ヤヨイ」16例、「ヤヨキ」2例がある。
- 8) 喪の期間は、時代により人により変化があったようだが、「ヤヒヤヨ（8日8晩）」、「ヨソヤ（48）」、「ヒトセ（1年）」の例がある。
- 9) フタカミ：イサナギ・イサナミの功績を称えた呼び方である。
- 10) 1966年のヲシテ文献の松本（2016）の再発見以来、松本、池田、青木、平岡等の研究者により、基礎研究が続けられ、研究の環境が整えられてきた。
- 11) ヲシテ研究所 <http://woshite.com/page1.html>

参考文献

- 青木純雄・平岡憲人『よみがえる日本語—ことばのみなもと「ヲシテ」』、明治書院、2009年。
- 池田満『ホツマ辞典—漢字以前の世界へ—』展望社、1999年。
- 池田満『『ホツマツタエ』を読み解く—日本の古代文字が語る縄文時代』、展望社、2001年。
- 池田満『定本ホツマツタエ—日本書記・古事記との対比—』、展望社、2002年。
- 池田満『記紀原書ヲシテ上巻』、展望社、2004年。
- 池田満『よみがえる縄文時代イサナギ・イサナミのこころ—新発見『ミカサフミ—ワカウタノアヤ』アマテルカミが解き明かす—』、展望社、2013年。
- 馬淵和夫『五十音図の話』、大修館書店、1993年。
- 松本善之助『ホツマツタエ発見物語』、展望社、2016年。
- 上村幸雄「五十音図の音声学」『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻（上）』、明治書院、1989年、41-63頁。
- ヲシテ研究所ホームページ <http://woshite.com/page1.html>

(ないとう・ゆうこ 外国語学部准教授)